

テレビドラマ『私の家政夫ナギサさん』にみる家事労働 —固定観念からの解放—

Housework as seen in the television drama *My Housekeeper Nagisa-san*:
Liberation from stereotypes

清水 美知子*
Michiko SHIMIZU

Abstract

This paper considers housework as it is depicted in the television drama *My Housekeeper Nagisa-san*, broadcast in 2020 in Japan. This dramatic series depicts the process by which Mei, a 28-year-old single woman who has a successful career but dislikes housework, discovers her own meaning of happiness through her interactions with Nagisa-san, a 50-year-old man who comes to work for her as her housekeeper. The theme of this drama could be described as liberation from stereotypes. The main character, Mei, has developed a complex because of her inability to do housework, which she considers a sign of a fully mature woman. But through experiencing Nagisa-san's kind, warm support, she learns the importance of depending on others sometimes, instead of trying too hard to do everything herself. She also had considered housework to be the lowest level of work compared to other kinds of work in the labor market, but through observing Nagisa-san's work she comes to recognize housework as work that provides value through supporting people's daily living and enriching their lives. The COVID-19 pandemic has increased the burden of housework, and this can tend to lead to a buildup of stress. But what people need is freedom from pressure. This television series reminds us that outsourcing of housework is an option.

キーワード：家政夫, 家事労働, ジェンダー, 固定観念, ワークライフシナジー

I はじめに

1. 家事労働の負担感

2020年, 新型コロナウイルス感染症の広まりで, 私たちの暮らしは大きく変わった。緊急事態宣言を受け, 4月から5月には多くの飲食店・商業施設等が休業・閉鎖対応を行ったほか, 3月以降続いていた休校・保育施設等の休園措置の影響や在宅勤務の実施等によって, 以前より自宅

* 関西国際大学 社会学部

で過ごす時間が長くなった人が増加した。

長引く自粛生活で浮上した問題のひとつに、家事労働（家事・育児等）の増加がある。内閣府が15歳～89歳の男女約1万人を対象に実施した調査によれば、家事や育児など家事労働に充てる時間は、コロナ前を100とすると、感染拡大第1波にあたる2020年5月時点で、男性103.6だった一方、女性は111.7と大きく伸びていた。生活全体の満足度を見ても、新型コロナウイルス感染拡大前に比べ、男性・女性ともに低下したが、女性の低下幅は男性と比べて大きかった¹⁾。

家事労働は、①生活手段を整える労働—炊事、洗濯、掃除、買物など、②サービス労働—育児、看護、介護など²⁾に分類される。近年の急速な少子高齢化により、育児、介護は無償労働として家計の担っている役割が大きいと見なされ^{注1}、政策の必要性から社会的な関心も高い。ひるがえって、「生活手段を整える労働」である炊事、洗濯、買物などについては、政策課題としての議論すら始まっていないのである。

人々の意識においても、育児や介護以外の家事に対する評価は低い。たとえば、「男女共同参画社会に関する世論調査」（内閣府2019年）では、家事労働を「育児」「介護」「育児・介護以外の家事」に分け、社会的な評価について質問している。結果をみると、「手当の支給や税制上の優遇などで経済的に評価する」という回答は、「育児」68.6%、「介護」76.3%、「育児・介護以外の家事」35.2%であった。一方、「この役割について経済的・社会的に評価する必要はない」という回答は、「育児」20.7%、「介護」11.4%、「育児・介護以外の家事」44.5%であった。しかも、性別や年代に関わらず同じような傾向を示した^{注2}。

家事労働は、生きるために不可欠な衣食住にまつわる労働であり、労働力を提供して対価を得る市場労働と同様に、私たちの生活の一部でもある。しかし、無償で提供される家事労働は、国民総生産（GDP）にもカウントされず、その実態が見えにくい。実態がつかめない家事労働の価値判断は曖昧にならざるをえず^{注3}、それが評価の低さにつながっている。そして、家事労働の評価の低さが、おもな担い手である女性たちの負担感を助長しているのである。

2. 家政婦（夫）ドラマが人気

周知のとおり、日本では「家事労働＝女性の仕事＝無償労働」という認識が定着している。しかし、料理や掃除、洗濯などの家事を有償で行う労働者がいることも忘れてはならない。いわゆる〈家政婦（夫）〉と呼ばれる人たちである。総務庁統計局の職業分類によれば、家政婦（夫）は中分類「家庭生活支援サービス職業従事者」のなかの、小分類「家政婦（夫）、家事手伝い」に属し、「個人の家庭又は個人などの求めに応じて、調理・育児・洗濯・掃除・介護などの生活を支援するためのサービスの仕事に従事するもの」に分類される^{注4}。

現代を生きる日本人にとって、家政婦（夫）という存在はあまり馴染みのないものであろう。しかし、テレビドラマの世界では、家政婦（夫）が登場する作品が人気を博している^{注5}。なぜ、家政婦（夫）ドラマが人気なのか。第1に、家政婦（夫）という“他者の目”を通して、他人の秘め事や家族の裏側をのぞき見たり、家族の再生を内側から描いたりできるからである。時には心温まるホームドラマ、時にはスキャンダラスな愛憎劇など、あらゆるドラマになりうる家政婦（夫）ドラマは、脚本・演出上の利点がある。第2に、ドラマの舞台が、もっぱら家庭だからである。決まったセット・場面でストーリーを展開できる家政婦（夫）ドラマは、制作費の削減という利点につながる。

コロナ禍の2020年4月から9月にかけては、奇しくも家政婦（夫）が登場するドラマが3本も放送された。『家政夫のミタゾノ』第4シリーズ（テレビ朝日系／金曜23：15～）、『きょうの猫村さん』（テレビ東京系／水曜0：52～）、『私の家政夫ナギサさん』（TBS系／火曜22：00～）である。注目すべきは、いずれの作品においても、男性俳優が家政婦（夫）を演じている点である^{注6}。

筆者はここ10数年、女中や家政婦が登場する小説や漫画を通して、近現代日本の家庭や家族、そして社会について研究してきた。研究を進める中で、小説や漫画を原作・原案としたテレビドラマが少なくないことが明らかになった。優れた脚本・演出、巧みなキャスティングが紡ぎ出すドラマの世界は、時代と社会をいきいきと描き出す。言い換えれば、テレビドラマもまた社会の産物にすぎず、それを生み出した時代と切り離して考えることはできない。

本稿ではひとつの試みとして、2020（令和2）年7月から9月にかけてTBS系列で放映されたテレビドラマ『私の家政夫ナギサさん』を題材として取り上げる。筆者がこの作品に着目する主な理由は3つある。

1つ目は、男性が家事のスペシャリストとして登場するからである。家政夫ドラマは日本において、数は少ないものの1950年代から見られた。たとえば1956～58年には、派出夫（＝家政夫）が主人公のマンガ『ますらを派出夫会』を原作にした同名のコメディ映画やドラマが公開、放送されている^{注7}。近年では、女装した家政夫が派遣先の内情をのぞき秘密を暴いていく『家政夫のミタゾノ』シリーズが記憶に新しい。しかし、『私の家政夫ナギサさん』のひとり暮らしの若い女性のもとに男性が派遣され家事万端を担当するという設定は、他に類をみないものである。

2つ目は、“家事労働”に焦点をあて、その価値について考えさせるドラマだからである。家事代行サービス会社がドラマの家事（掃除）を監修しており、家政婦（夫）の仕事内容に誇張がなく丁寧に描かれている。その意味でも、従来の家政婦（夫）ドラマとは一線を画している。

そして3つ目は、ドラマの制作側が予想した以上の高い視聴率を獲得したからである^{注8}。『私の家政夫ナギサさん』最終回の視聴率19.6%（関東地区）は、2016年に社会現象にもなった同じドラマ枠の『逃げるが恥だが役に立つ』（TBS系列、以下『逃げ恥』）に迫り、全話を通しての平均視聴率については『逃げ恥』を上回った^{注9}。

ドラマは優れた脚本と演出、キャスティングの三拍子がそろうとヒットすると言われるが、最も重要なのは「時代性」³⁾である。『私の家政夫ナギサさん』が人気を博した理由や背景について、特に家事労働の観点から考察することが、本稿のおもな目的である。

Ⅱ 『私の家政夫ナギサさん』の概要

1. 原作はネット配信漫画

テレビドラマ『私の家政婦ナギサさん』は、TBSテレビ「火曜ドラマ」の枠で、2020年7月7日から9月1日まで全放映された9話から成るラブコメディである。当初は2020年4月14日からの放送予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により撮影が中断し、開始・放送が延期になった。本編終了後の翌週（2020年9月8日）には、最終話から1カ月後の主人公たちの生活を描く「特別編」が放送された。

ドラマの原作は、電子書籍配信サイト『コミックシーモア』内の少女漫画レーベル「恋するソワレ」で2016年8月19日から配信された四ツ原フリコの漫画『家政夫のナギサさん』である。原

作漫画はいったん2017年4月に第8巻で終了した。しかし、テレビドラマ化が決定した後の2020年5月14日に続編として第9巻が配信され、最終的には第11巻で完結している。単行本としては、ネット配信の第1巻～第8巻のダイジェストである『家政夫のナギサさん』（プチルコミックス、2020年4月）が、原作コミックを小説化した藤咲あゆな『小説 家政夫のナギサさん』上巻（プチルノベルス、2020年4月）、同下巻（2020年5月）が刊行されている。

2. ドラマのあらすじ

『私の家政夫ナギサさん』は、仕事はできるが家事が苦手な独身女性が、家政夫としてやってきた中年男性との交流を通して、自分にとっての“幸せのかたち”を発見するまでのプロセスを描いたドラマである。原作漫画では、もっぱら主人公と家政夫の心の交流を中心に物語が展開するが、テレビドラマでは、主人公の両親や妹、職場の同僚や仕事関係の人々、主人公に好意を寄せるライバル会社の社員や病院の医師など、原作には登場しない人びとも登場し、家族との関係、仕事への向き合い方、恋愛模様なども描かれている。

ドラマのあらすじを、主人公と家政夫との関係に焦点を合わせて紹介しておこう。なお、登場人物のセリフについては『私の家政夫ナギサさん』DVD-BOX（TBS、2021年1月発売）の映像をもとにしている。

主人公の相原メイは、製薬会社の営業職 MR（医療情報担当者：Medical Representative）^{注10}として働く独身女性である。仕事は優秀社員賞に輝くほど有能で速く、職場や取引先からの信頼も厚い。チームリーダーに抜擢され多忙な日々を過ごすメイには、ひとり暮らしの部屋で家事をする余裕がない。そもそも家事が苦手でマンションの部屋は散らかり放題、仕事の忙しさゆえに届いた通販の箱を開ける暇もない。ベッドの上は洋服だけでなく、寝床はもっぱらリビングのソファである。食生活もコンビニ弁当やカップ麺、ゼリー飲料で済ませるなど大いに乱れている。結婚には関心はあるが、仕事が忙しすぎて恋人はいない。そんなメイの生活を心配し、家事代行サービスの会社で働く妹の唯が送り込んだ家政夫が「ナギサさん」こと嶋野ナギサである。50歳の男性という家事代行サービス業界では異色の存在だが、指名率ナンバーワンを維持し、名刺に“プレミアム”の称号が記されるレジェンド家政夫である。

物語は、メイの28歳の誕生日に、妹の唯が4日間の家事代行サービスのトライアルをプレゼントする場面から始まる。最初は、おじさんが家にいるなんて、絶対にイヤと拒絶したものの、掃除、洗濯、料理と完璧に家事をこなし、快適な家庭環境を整えてくれるナギサさんを、メイは次第に受け入れていく。口数は少ないが、謙虚で穏やかな人柄。50歳ならではの豊富な人生経験。メイは共に時間を過ごす中でナギサさんを信頼し、その存在に安らぎを覚えるようになる。一方、作ったご飯をいつも美味しいと食べてくれて、困ったときには頼りにしてくれるメイは、ナギサさんの〈お母さん〉になりたいという夢を叶えてくれる存在でもあった。

家政夫として優秀なナギサさんに、転職の話が浮上した。本社が教育部門のマネージャー（管理職）として迎えたいというのである。異動すれば、メイ宅での家政夫の仕事はできなくなる。ナギサさんから契約終了を告げられたメイは、「ナギサさんがいない生活なんて考えられない」と動揺し、「私たち結婚しませんか？」と唐突にプロポーズする。「結婚とはつまり、この先もずっと一緒に暮らしていくということですよ？ 私のようなおじさんと…」と戸惑うナギサさんに、メイは4日間の“トライアル結婚生活”を提案する。ところがドライアル3日目、ナギサさんは

突然、「結婚の話はなかったことにさせてください」という手紙を残して姿を消す。

自分との結婚にメリットがないからナギサさんは去ったのかもしれないと、メイは落ち込んだ。しかし、ナギサさんが家を出て行った本当の理由は、メイとの年齢が20歳以上離れていることだった。自分にいつか介護や世話が必要になり、彼女の負担になってしまうかもしれないと悩み、身を引こうとしたのである。それを知ったメイは「おじさんなのに家政夫やっているナギサさんが、いまさら年齢差がどうとか型にはまったこと言わないでください」と力説し、「もしそうなったら、私がいまよりもっと稼いで介護のプロの力を借ります」と言い放つ。続けて、「その時々で話し合い、足りないところを補っていけたらいいんです」と提案し、ナギサさんの肩の荷を下ろしてしまう。ナギサさんも「私もあなたを手放したくないんです。それは、つまり、ちょっと恥ずかしいながら、好きだってことだと思います」とメイに告白し、ふたりは晴れて結婚する。

メイとナギサさん以外のおもな登場人物としては、メイに完璧を求め“やればできる子”と鼓舞し続ける母親の相川美登里、母親の期待を裏切って“できちゃった婚”により大学を中退した妹の福田唯、メイの同僚かつ親友で婚活に勤しむ陶山薫、隣室に住む外資系製薬会社のMRで見た目も性格も良い田所優太など、多様なキャラクターが登場し、それが物語に多層性を与えている。

3. ドラマ人気の背景

『私の家政夫ナギサさん』は、仕事はできるが家事はできない女性のもとに、中年の見た目も冴えないおじさんが家政夫としてやって来て、紆余曲折を経て結婚するという、要約すれば3行にも満たないシンプルな物語である。主人公のメイは、イケメン医師やハイスペックなMRから交際を申し込まれるにもかかわらず、結婚相手に20歳以上も年の離れたおじさんを選ぶという、浮世離れたファンタジーでもある。また、登場人物は善人ばかりで、ドラマの題材になりがちな恋愛の三角関係、仕事と恋愛の板挟み、社内の揉め事やパワハラなど、対立やトラブルは起こらない。しかも、番組ホームページの「おじさん、私家事やらなくてもいいんですか？」というキャッチコピーに示されるように、ラブコメディでありながら、恋愛を前面には打ち出していない。

ドラマ開始直前の2020年7月初旬、主要キャストの取材会が行われた。そこで、主人公メイを演じる俳優の多部未華子は作品について次のように語っている。「大きな事件が起きるわけではないですし、ハラハラも楽しいハラハラなので、世代を問わず楽しく見ていただけるドラマになっていると思います。一週間の息抜きになればいいなと思っています^{注11}」。

上記のような物語が、いったいなぜ、多くの人から支持されたのであろうか。紙幅の都合もあり、その理由を3つに限って述べておきたい。

第1は、新型コロナウイルス感染症の流行という社会状況である。コロナ禍で、現実の世界では暗いニュースがあふれ、人びとは得も知れぬ不安を抱き、疲れを感じていた。そんなとき、日常の生々しさや負の部分を描いたドラマは負担になる。娯楽でみるテレビドラマくらいストレスなく楽しみたいという視聴者の心理が、プラスに働いたと推察される。シンプルで分かりやすく、明るく平和的な物語が、世代を超えて多くの人びとから支持されたのである。

第2は、働く女性にありがちな体験が、ドラマの中でふんだんに盛り込まれていたからである。ナギサさんが散らかったメイの部屋を掃除すると、同じテレビのリモコンが5つ見つかった。服

を整理すれば、あちこちのジャケットのポケットからリップスティックが10本も出てきた。疲れて帰宅したメイが化粧を落とさずに寝てしまったするなど、いわゆる“働く女性あるある”のエピソードが劇中で描かれている。番組ホームページの「ファンメッセージ」上では放映当時、主人公メイに共感する感想が数多く寄せられたものだった。こうした演出上の工夫が、リアルさを売りにしないこのドラマに、適度な現実味と親近感を持たせていたと言える。

第3は、先述の人気ドラマ『逃げ恥』と同じく、家事労働や家事代行サービスをテーマにすえたドラマであったからである。『逃げ恥』は2020年5月から6月にかけて、『私の家政夫ナギサさん』が放送延期になった穴埋めの「特別編」として再放送された。『私の家政夫ナギサさん』は『逃げ恥』の後続番組としてスタートしたため、多くの人びとの関心を集めることになった。

『逃げ恥』は、派遣切りされた女性が、独身会社員の男性と契約結婚し、専業主婦として雇われるという設定であった。主婦が行う家事を有償労働として見ることで、夫婦間で見落とされがちな“やりがい搾取^{注12}”に着目した。そして、家事は女性がやって当たり前のものでなく、ひとつの仕事であることを世に問うた。一方、『私の家政夫ナギサさん』は、『逃げ恥』とシチュエーションが男女で逆転している。すなわち、ナギサさん（男性）が家政夫としてメイ（女性）宅の家事を行うのである。

同じ家事代行サービスを扱いながら、家事の担い手が男性になると見える方が変わってくる。次章では、『私の家政夫ナギサさん』に描かれた家事労働についてドラマに沿って見ていくことにしよう。

Ⅲ 『私の家政夫ナギサさん』にみる家事労働

1. 〈おじさん〉なのになぜ家政夫？

1.1 男性が家事を仕事にすることへの偏見

『逃げ恥』と『私の家政夫ナギサさん』に共通しているのは、家事代行サービスから〈家事という仕事〉を見つめるという点である。『逃げ恥』では、35歳の独身男性が家事をしてくれる25歳の女性を雇うという設定であった。『私の家政夫ナギサさん』では、それを発展・進化させ、28歳の女性が50歳の男性を家政夫として雇う設定で描かれている。

従来の固定的な性別による役割分担にとらわれず、男女が平等に、自らの能力を生かして自由に行動・生活できるというジェンダーフリー（gender-free）の発想からすれば、男性が家事を職業にしてもよいし、女性が男性から家事サービスを受けても何ら問題はない。ところが、家事サービスの提供者あるいは消費者の性別や年齢によって、人びとの受け止め方は大きく異なる。同じ題材を扱っても、家事が苦手な仕事一辺倒の若い女性が、家事の得意な中年男性を雇うという設定に変えるだけで、“斬新さ”を感じてしまうのはなぜなのだろうか。それは、“家事は女性がするもの”という先入観があるからにはかならない。

『私の家政夫ナギサさん』では、“男性が家事の仕事をする”や“若い女性が中年の男性から家事の支援を受ける”に対する偏見が随所で描かれる。たとえば第1話には、ナギサさんがメイに家事代行サービスの作業報告を行うシーンがある。「おためになっていた洗濯物をセーターやブラウスなど素材がごとに分けて、お洗濯させていただきました」というナギサさんに、メイは「えっ、あの、それって下着は？」と反応、「そちらも型崩れしないようネットに入れて分

けてお洗濯いたしました」とナギサさんが答えると、メイは「え～っ!?!」とあからさまに嫌な顔をみせる。「家政夫だなんだいう以前に、知らないおじさんが家にいることが…それに洗濯物だって、冷静に考えておじさんが女性の下着触るとか、もう絶対無理ー!」(第1話：傍線引用者)というモノログに示されるとおり、メイは男性しかも〈おじさん〉が家事をするに強い違和感を覚えている。もし、家事サービスの提供者が女性であれば、ここまで露骨な反応はしなかったにちがいない。

劇中では「おじさんなのに…」というセリフが頻繁に出てくる。メイは正式に家事代行サービスの契約するまで、ナギサさんのことを〈おじさん〉と呼んでいた。「おじさんなのに家政夫をしている」「おじさんなのに料理がうまい」「おじさんなのに家事は完璧」などのセリフも多い。そこには、家事を職業とする男性への“揶揄”や“侮蔑”の意味が多少なりともこめられている。ナギサさんも「私はおじさんですから」と自嘲気味に漏らすこともあり、家政夫を生業とする生きづらさが感じられる。

一方で、メイはナギサさんの完璧な仕事ぶりを見て、大いに感心する。そして、「これだけの家事ができる男性だったら、他のお仕事でのいくらでもできそうなのに、どうして家政夫の仕事を選ばれたのですか。その何て言うか…中略…家事ってつまらないのかなって」(第1話：傍線引用者)と素朴な疑問を投げかける。家事はつまらない仕事。思わずこぼれた言葉から、仕事に対する価値観がうかがえる。すなわち、メイは、家事労働(家の内の仕事)を、市場労働(家の外の仕事)に比べて一段低いものと見下していたのである。

1.2 夢は〈お母さん〉になること

家事はつまらない仕事ではないか、というメイの問いに対してナギサさんは、「私にとって家事は仕事です。こうやって誰かのお役に立てているのであれば、仕事は楽しいです。つまらないとは思ってないですよ」と言い切り、続けて「私は小さい頃、お母さんになりたかったんです」と明かした。メイは「お母さん? どういう意味なんだろう」と興味を持った(第1話：傍線筆者)。

お母さんになること。それはメイにとって「呪いの呪文」だった。劇中では、メイの幼稚園時代の回想シーンが繰り返し登場する。幼い頃のメイは、いつも温かく包み込んでくれる優しいお母さんに憧れ、将来は〈お母さん〉になりたいと思っていた。それを母親に伝えたところ、「そんな夢やめなさい。メイたちにはお母さんみたいになってほしくないの。もっと上を目指しなさい。男の子なんかには負けない仕事のできる女性になるの。お母さんなんてくだらないこと、二度と言わないで」(第1話：傍線引用者)と否定されたのだった。

ひるがえって、ナギサさんは、なぜ〈お母さん〉になりたかったのか。その理由が明かされるのは、ドラマ後半になってからである。第5話の終盤、ナギサさんが提出した履歴書から、かつて業界最大手の製薬会社でMRとして働いていたことが判明する。ナギサさんはかつてメイと同じ職業に就いていたのである。「ナギサさんっていったい何者?」とメイは驚き、ナギサさんの過去について興味を持つようになる。

家政夫の仕事に就く前、ナギサさんは会社員だった。理工系の大学を卒業後、最先端技術分野の会社でセールスエンジニアとして働いていた。製薬会社のMRに転職したきっかけは、母親がガンを患ったからだ。闘病する母のために少しでも役に立てる仕事をとって、転職を決意した。ナギサさんは半導体の技術営業で培った抜群の営業成績がものを言い、中途入社としては異例の速さで社内トップの成績を収めるようになった。仕事は充実していたが、プライベートの時間は

削られ、母の見舞いに思うように行けなくなった。医療系の職に就けば母の役に立てるかもしれないという考えが、いかに甘かったのかと、転職してから思い知ったのである。

MRとして働いている頃、ナギサさんに憧れてMR職をめざす女性がいた。同じく中途採用の箸尾玲香（以下、箸尾さん）である。彼女は入社2年目でMR試験に合格し、新薬を扱う激戦区の担当となった。仕事に追われ、食事もろくに取れないような生活が続く箸尾さんに、ナギサさんは「大丈夫ですか」と声をかけ、手作りのお弁当を届けたり薬剤の資料を回してやった。ナギサさんは〈お母さん〉のように接し、箸尾さんの癒しの存在となっていたのである。

ある日、ナギサさんの出張中に、母親の容体が急変し亡くなってしまふ。「母のためにと決めた仕事だったのに、そばにいてあげることもできなかった」と、後悔ばかりが胸に押し寄せてきた。葬儀の段取りをしているところに、箸尾さんから電話がかかってきた。しかし、ナギサさんは十分に話す時間もなく切ってしまった。忌引き明けにナギサさんが出会った彼女は別人のようで、ストレスをため込みすぎてついには倒れてしまふ。診療内科からの診断書が出てからすぐ、箸尾さんは会社を辞めた。「今思えば、彼女はずっと助けを求めていたのに、私はそのシグナルに気づきませんでした。変調のサインに気づく機会は何度もあったのに、私が至らないせいでそのまま追い詰めてしまいました」（第7話）。自責の念に苛まれたナギサさんも、製薬会社を辞めた。5年前のことである。そして、家政夫に転身したのである。

自分の過去についてメイに話しながらナギサさんは花柄の手帳を取り出した。それは箸尾さんが退職するとき忘れていったものだった。「この手帳は私の戒めです。母の容体が悪化していたことにも気づかず、箸尾さんの状態にも気づかず、何が人のために生きたいだ、何がお母さんになりたいだ、とこれを見るたび思い出します」。そして、「いつも優しくて温かく見守ってくれる。私にとってお母さんとはそういう存在なんです」とメイに伝えるのだった。これに対しメイは、「ナギサさんが家政夫になった理由がわかった気がします。だってナギサさん、いつもちゃんと見てくれるから^{注13}」と返した（第7話：傍線引用者）。

身近にいる人の日常を支え、優しく温かく見守り、いきいきと暮らせる生活の基盤を作ってあげたい。これがナギサさんの願いなのである。〈お母さん〉のような包容力で後輩を支えることができなかつた苦い経験から、家政夫の仕事を通して、人のために尽くすことを信条とし、サポートすることが自身のやりがいにつながる、という仕事観を持つようになったのであろう。

2. 女性は家事ができて一人前？

2.1 家事ができない女性への偏見

ナギサさんが家政夫として来てくれたことで、メイは健康的な食事、ぐっすり眠れるベッド、整理整頓された快適な空間を手に入れることができた。ただ、ナギサさんに感謝しつつも、メイは家政夫の手を借りることへの抵抗感がぬぐえない。家事ができないなんて思われたくない。マンションの隣室に住んでいるライバル会社のMR田所に対しては、ナギサさんが“父親”であるとうソをついてしまふ。そればかりか、メイは、部屋を訪ねてきた母親・美登里にも、家政夫のサポートを受けていることを隠そうとした。しかし、思わぬタイミングで美登里とナギサさんが遭遇し、家事が全くできないことが発覚する。それを知った美登里はショックを受け、メイに次のような言葉をかけた。

家事が苦手なのは分かったけれど、ちゃんとやらなきゃ。今からでも遅くないよ。ねっ、やればできるよ。まだ若いんだし。いくら家事が苦手だからって家政夫さん雇っているなんて。そもそもなんで家政夫がおじさんなのよ？ あなたも恥ずかしくて言えないでしょう。 メイももう28で結婚も考える年だし、ねえメイは結婚しても今のお仕事続けるんでしょ？ だったら今のうちから仕事と家事を両立できるようにしておかないと。 お母さんにはできなかったから、あなたにはそうなってほしくないの。お母さん、メイには一片の悔いもない人生を送ってもらいたい。大丈夫よ、メイは（第3話、傍線引用者）。

母親の美登里の劇中での年齢は55歳。1980年代後半から90年代初頭にかけてのいわゆるバブルの時代に就職した世代である。1985年に男女雇用機会均等法が制定され、女性も働き続ける機会が開かれた。しかし、当時“寿退社”という言葉が流行していたように、“結婚を機に仕事を辞めることが女の幸せ”という風潮は強かった。美登里も若い頃は仕事一筋で、結婚後も仕事を続けるという夢を持っていた。しかし、家庭に入ってほしいという夫の意向に従い専業主婦になった。いざ専業主婦になってみたら、彼女は家事が全くできず、家事にやりがいを見いだすこともできなかった。

母親は自分のルールを娘に対して巧みに適用しながら、自分が実現できなかった理想を娘に果たしてもらうことを望みがちだ。すなわち、母親の現在の自己ではなく、母親が抱く理想の自己に、娘が同一化することを期待するのである⁴⁾。専業主婦の美登里の場合は、男性と同じように家の外で働き、社会的成功をおさめることが理想の自己である。一方で美登里は、娘に自分と同様に結婚して家庭を持ってほしい、しかも、自分が苦手な家事も頑張してほしいという願いも持っている。社会的な達成と妻や母になるという家庭的な成功の両方を叶えなければ、女性として十分でないというメッセージを送り続けたのである。

メイは家事ができないことに極度のコンプレックスを持ち、自己肯定感もきわめて低い。仕事でうまく行かないことがあると、「私なんて大した取り柄もないし、家のこともできないし」と卑下する。ナギサさんが「あなたは立派な努力家です」と励まして、「いくら頑張っても結果が出ないと意味がないんです。仕事ができない私なんて需要ありません」などと落ち込んだ。それは幼い頃から、「やればできる子」と母親から励まされ、家事も仕事もできる女性になってほしいと期待され続けた結果であった。

やればできる子。これもメイにとって「呪いの呪文^{注14}」だった。母親の娘に対する呪い（＝プレッシャー）は、母親が娘を一方的に支配するというような単純なものではない。娘は自ら進んで、母親の理想の自己と自身の理想の自己を一致させようとすることもあり得る。メイの場合も、母親の“私のようになれ”“私のようになるな”とダブルバインドのメッセージを健気に受けとめ、「私はやればできる子だから」と必死に自身に言い聞かせ、母親の期待に応えようとした。だからこそ、家政夫の手を借りていることを、母親に知られたくなかったのであろう。

母親が帰ったあと、メイは家事代行サービスを継続しないことをナギサさんに伝えた。「私、やっぱりこのままだとダメだと思います。いくら仕事が忙しいからって、いつまでも人に甘えていてはいけないって。私もそろそろ結婚も考えないといけないし、家事だっていつかは克服しないといけないし」とナギサさんに伝える。それに対しナギサさんは、「そんなに一人で全部頑張らなくてもいいと思います。今はお仕事お忙しいそうですし…。差し出がましいかもしれませんが、

睡眠はきちんと取れていますか。お食事もコンビニやインスタントばかりでは、栄養が偏ってしまいます」と、〈お母さん〉のように論ずるのだった（第3話：傍線引用者）。

2.2 苦手なことは誰にでもある

メイは、母親の期待に応えようと、寝る時間を削って家事も頑張り始めた。とはいうものの、もともと家事が苦手なのに加えて会社での仕事に追われ、空回りするばかり。ついには過労と寝不足とストレスで倒れてしまう。たまたま部屋に居合わせた美登里は、倒れた娘に何をしてやればいいのかわからず、ナギサさんに電話で助けを求める。

駆けつけたナギサさんはメイに対して、「どんなに頑張っても倒れてしまっても元も子もありません」と論ずる。その姿を見て、美登里は「きっとあの子（＝メイ）には私よりもあなた（＝ナギサ）の方が必要と思うから」と帰ろうとする。ナギサさんは、「メイさんに必要なのは私ではありません。私も本当はお母さんになりたかったんですが、本物にはかないませんから。お母さんにしかできない仕事というものがあるんじゃないでしょうか？ そばにいてあげるだけでいいんです」と優しく声をかけた。気を取り直して、美登里はメイのために雑炊を作ろうとした。しかし、料理が苦手なために失敗してばかり。「ほら言ったでしょ。私には向いてないんです」と投げ出そうとする美登里に、ナギサさんは「大丈夫です。ちゃんと出来上がるまで見ていますから。何もできなくてもいいんです」と励ました（第3話：傍線引用者）。

目を覚ましたメイは、美登里の作った雑炊を口にする。「味はどう？」と問われたメイは、「なんかちょっと味がしない。でも、うん、この味、私好き」と答える。美登里は「大丈夫。お母さんずっとメイのそばにいるからね」とメイを抱きしめる。ありのままの娘を愛しいと思っている母親の思いが伝わり、メイの心にも温かいものが湧き上がる。その抱擁は、あたかも美登里が認められなかった“できなかった自分”を抱きしめているかのようにも見えた。メイの状態が落ち着くと、美登里は「あの人（＝ナギサさん）いい人だね。メイのそばにあんな人がいるんだったら、とりあえずは安心。今は仕事に集中しなさい。家のことはもう少し落ち着いてからでいいからね」と告げた（第3話：傍線引用者）。

ナギサさんはメイの母親である美登里の心も軽くしてくれた。メイが倒れる数日前、美登里はナギサさんの勤める家事代行サービス会社を訪ね、先日の非礼を詫びるとともに、彼女の思いを次のように告白している。「今でも後悔してるんです。もう少し子どもたちに母親らしいことをしてやれていたらって。それなのにもう、メイが私に似て家事がまるっきりできないなんて、もうほんとにショックで。でもね。今からでも遅くないと思うんです。苦手なことでもやれば必ずできるようになるはずですから、甘やかしたくないんです」。これに対して、ナギサさんは「苦手なことやできないことのひとつや二つくらい誰にでもあります。メイさんは本当に何事にも一生懸命な方です。それはきとお母様の期待に応えたいんだと思います。できるところだけじゃなくて、できないところも見てあげてください」と返した（第3話：傍線引用者）。

美登里は、“母親は家事が出来て一人前”という観念に縛られ、家事が苦手な自分にコンプレックスを抱いていた。コンプレックスを持つことは悪いことばかりではない。自己と向き合うことで、得意なことを見つける機会や他者を尊敬できる契機にもなるからだ。しかし、コンプレックスをこじらせてしまうと、認知が歪んでいく。美登里は、家事なんてつまらない仕事だ。お母さんなんてくだらないと、自分ができないことを棚上げにして思い込んでいたのである。

彼女の抱える自己矛盾は、自分にできないことを娘に求め続け、「やればできる子」と追い込ん

だ点にある。母親の期待に応えようと頑張りすぎた結果、メイは倒れてしまった。しかし、母親の美登里が本当に満たされるのは、娘が自分の期待に応えるのではなく、“できなかった自分”を認め、受け入れることだった。誰にでも苦手なことはある。家事ができないからといってダメな母親ではない。存在そのものを受け入れ、結果ではなくプロセスを認めることも母親の仕事であると、美登里は気づいたのである。ナギサさんは、美登里が自身にかけた「呪いの呪文」も優しく解いてくれた。

倒れてしまっただけで元も子もない。バリバリ働くためにも、きちんと食事をして、しっかり休まなければならないというナギサさんの言葉は、メイの心に響いた。母親公認のもと、メイは正式にナギサさんと家事代行サービスの契約を結んだ。呼び方も「おじさん」から「ナギサさん」に変わった。ナギサさんに家事を任せたメイは心に余裕ができ、仕事にも集中できるようになった。仕事で疲れて帰ってきたメイを、ナギサさんが優しく見守り、温かい言葉で励ましてくれた。ナギサさんは散らかった部屋のみならず、メイの心の中まで片付け、キレイにしてくれたのだった。

IV おわりに

1. 固定観念からの解放

『私の家政夫ナギサさん』は、“男は仕事、女は家庭”というジェンダー役割を反転させたという点で、画期的なドラマであった。ドラマ化に携わったTBSテレビの編成担当者によれば、「女性が男性の家政夫を雇うという、時代の半歩先を行く設定にすることで、バリバリ働く女性にとっての癒しを描きたかった⁵⁾」という。この作品に通底しているのは、“固定観念からの解放”であろう。劇中には、私たちの意識に潜む家事労働をめぐるさまざまな思い込みや偏見と、それらの呪縛から解き放たれるプロセスが、明るく軽いタッチで描かれている。以下では、この作品に込められたメッセージについて考えてみたい。

1.1 一人で頑張らなくてよい

内閣府の『令和2年版男女共同参画白書』によれば、夫婦共働きが増えているにもかかわらず、妻が家事・育児にあてる時間は夫の2倍超と、女性に負担が集中している実態が浮き彫りになった。「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ」という考え方に反対する人は6割に上るもの^{注15}、実際は妻が“家庭を守る”役割を果たしている家庭が大半を占める。夫の家事参加が進まない以上、自分がやらなければという意識に縛られ、家事をこなさきれない罪悪感に苛まれ、家事を負担に感じる女性は少なくない。しかも、家事が上手にできることが“女らしい”という社会通念は根強く残っており、それが女性をいっそう苦しめるのである。

ドラマ前半では、主人公メイの家事ができないコンプレックスとそれゆえの自己肯定感の低さをコミカルに織り込みつつ、ナギサさんとの交流によりそこから解放される姿が描かれていた。ドラマ終盤で、メイと同じく家事が致命的に苦手なライバル会社のMR 田所優太に、メイが次のように語りかけるシーンがある。「私も田所さんと同じで、今までは一人で全部何とかしなきゃ、完璧でなくっちゃって、ずっと息が詰まるような生活を送っていました。でもナギサさんがいてくれると、心がスーッと軽くなる。ほんとうに救われてるんです」(第8話：傍線引用者)。メイの言葉に背中を押された田所は、自身も家政夫を雇って、苦手な家事を任せるようになる。

男女を問わず、仕事も家事も完璧にこなせる人はそういるものではない。家事が苦手でもよい、

頼れる人がいれば頼っていいし、家事代行サービスを頼んでもいい。この作品は、ライフスタイルや性別、年齢を問わず、頑張りすぎている人びとに「休みなさい」というメッセージを送る。そして、自分の手に負えないときは、家事代行サービスのような“人に任せる”選択肢もあることを、私たちに気づかせてくれる。

1.2 家事は価値ある仕事

「はじめに」でも述べたように、家庭内で主婦が無償で行う家事は、家の外での賃金労働に比べると低く見なされることが多い。『私の家政夫ナギサさん』では、家政夫という有償の家事労働者を取り上げ、家事を“見える化”した。それによって家事には、モノをきちんと整える整理能力やバランスの良い料理を作る創造力や技術力、複数の家事を同時進行する段取り力など多方面の能力を要することが明らかになった。

ドラマの掃除パートを監修した家事代行サービス会社の料金表から推定すると、ナギサさんが担当するプレミアムコースの料金は1時間5000円程度である。1日3時間、週3回の契約を結んだメイは、家事代行サービスに月額12~16万円を支払っていると思われる^{注16}。家事労働はそれだけの経済的価値があり、多くの家庭においてそれを女性が無償で行っているのである。

掃除や洗濯が行われなければ、生活が荒れる。料理も買ってきたもので適当に済ませるだけでは味気ないし、栄養バランスが悪くなり健康を害するリスクもある。それはメイの暮らしぶりを見ても明らかだ。劇中、最初は「家政夫なんて」と小馬鹿にしていた美登里が、ナギサさんの仕事ぶりを見て思わず「立派なお仕事ね。家政夫さんて」とつぶやくシーンがある（第5話：傍線引用者）。家事がいかに人びとの生活に潤いを与え、人生を豊かにするものであるかを、この作品は、家事を天職とするナギサさんを通して改めて認識させてくれる。

家事を担ってくれた人に感謝し、賞賛する。『私の家政夫ナギサさん』は、これまで正当に評価されてこなかったシャドウワークとしての家事を“価値ある仕事”と評価し、家事をもっぱら担ってくれる〈お母さん〉を称えるドラマと言えよう。

1.3 夫婦は補い合うもの

結婚相手の条件について、メイは「今の自分の生活を1ミリも変えない人」と語っていた（第4話）。ナギサさんと結婚することにより、彼女は希望どおり自分の生活を全く変えることなく、生涯のパートナーを手に入れたといえる。最終話、ふたりがメイの両親に結婚の報告をするシーンでも、メイはただ座っているだけで、忙しく立ち回るのはナギサさんである。妹の唯に「お姉ちゃん、1ミリも手伝わないんだね」と指摘されても、「違う。ナギサさんの仕事の邪魔をしないようにしている」と悪びれるところは一切ない。“家事は夫婦で分担し合うべき”という近年のトレンドからすると、メイによる家事労働の一方的な搾取、すなわち“やりがい搾取”と受けとめられかねない言動である。

しかし、メイが結婚を申し込んだのは、ナギサさんが家事をすべて引き受けてくれる便利な存在だったからではない。それは将来の介護問題を心配するナギサさんに、もし介護が必要になったら自分ももっと稼いで介護のプロを雇い、ナギサさんの人生を背負う覚悟を示したことからもうかがえる。ひと昔前のドラマのラストとは男女逆転の演出も、固定観念からの解放と言えよう。

メイとナギサさんが結婚に踏み切ったのは、“居心地のよさ”が一致していたからである。メイにとってナギサさんは、〈お母さん〉のように包み込んでくれ、絶対的な信頼を持てる人であった。一方、ナギサさんにとってメイは、〈お母さん〉のような存在になりたいという長年の夢まで

叶えてくれる人だった。メイは「結婚しても私は私です。完璧じゃないし。だけど、お互い依存するのではなくて、足りないところを補ってあげたらと思うんです。私にとって一片も悔いのない人生は、これからナギサさんと共に歩いて行く人生です。だからもう、ナギサさんを手放したくないんです」と、結婚をためらうナギサさんを説得した（最終話：傍線引用者）。その言葉を聞いて、好きな相手の将来のために身を引こうとしたナギサさんも、新たな一步を踏み出す決意を固めた。

一見マイナスと思えても互いのニーズが合えば、補う形でプラスに変わる。自分が自分らしくいられる人と巡り会ったからこそ、短所も受け入れながら前に進もうと心に決めたのであろう。「共に歩いて行く人生」で必要なのは、情熱的な愛よりも、互いを許し合える優しさなのかもしれない¹⁷。既存の価値にとらわれない“幸せのかたち”があることをこのドラマは教えてくれる。

2. ワークライフシナジー

内閣府『令和2年版 男女共同参画白書』は、『家事・育児・介護』と『仕事のバランス』～個人は、家庭は、社会はどのように向き合っていくか』という特集を組んだ。そこでは、「家事・育児・介護」の負担が女性に偏っている現状があり、それが生活満足度等への影響、就業継続や仕事との両立の難しさにつながっている。その上で、家事労働と仕事のバランス・分担に向けては、男性に期待されている「仕事」のあり方や男性自身の「仕事」への向き合い方の変革とあわせて、「男性の家事・育児・介護への参画と対応能力の向上」と「家事・育児・介護における働き過ぎを防ぐ視点」が必要としている⁹⁾。

『私の家政夫ナギサさん』では、エプロン姿のナギサさんが毎回登場する。白地のエプロンの胸元には取り替え可能な布地がついており、そこには“BEST HOUSEKEEPER”“LIFE×WORK BALANCE”“LIFE×WORK SYNERGY”といった英字がプリントされている。なかでも、“LIFE×WORK SYNERGY”（日本語に訳せば「生活×仕事 相乗効果」）のロゴのついたエプロンは、放送当時TBSのオンラインショップでも販売されており、この作品が特に伝えたかったメッセージと見なすことができる。

一般には「ワークライフシナジー」と使われるこの言葉¹⁸は、“ワーク”（仕事）と“ライフ”（生活）を充実させて、“シナジー”（相乗効果）を起こそう、というワークライフバランスを発展させた概念である。ワークライフバランスという、どちらも両立させるために、どちらも少しずつあきらめてバランスを取るととらえがちだ。しかし、仕事と生活は本来切り離されるものではなく、互いに影響を及ぼし合っている。

労働経済学者の大沢真知子は著書『ワークライフシナジー』において、仕事と生活「両方の充実がともにシナジー（相互作用・相乗効果）をともなってどちらにもいい影響を与えるならば、どちらかを犠牲にしなければ他方が得られないということにはならない⁷⁾」と述べる。そして、充実した人生を送るためには、①仕事、②自分（健康や将来のための自己啓発）、③人間関係（家族・友人）、④社会貢献、という4つの視点から自分の生活を考えることを提案している。大切なのは、この4つを常に持っているかであり、それがあれば良しとすることだという。なぜなら、①～④の比重はライフステージによっても異なり、バランスにこだわりすぎると、自分を追い詰め、無理にその状態に持っていこうとして破綻してしまうからである⁸⁾。

コロナ禍で家事の負担は増え、外出もしにくく、ストレスもたまりがちである。家事の負担が

女性に偏るなかで、女性たちの“家事分担”を求める声は高まっている。しかし、男性が主な稼ぎ手である家庭が多く、男性の慢性的な長時間労働もあいまって、家事の分担はなかなか進まない。そのような社会状況で、『私の家政夫ナギサさん』は、家事負担が大きければプロに頼ってもよいという気づきを与えてくれた。家族の誰かに無理やり手伝ってもらうより、むしろ他人にお金を払ってやってもらう。得意でない家事を自分から切り離し、生じた時間を有効に活用する。“外注（アウトソーシング）”によりワークライフシナジーを高めるという選択肢が新たに加わったのである。

『令和2年版 男女共同参画白書』では、仕事と家事労働のより良いバランスを実現するためには、「『家事・育児・介護』を家庭内で分担するのみならず、担い手の多様化が重要」（傍線引用者）とも述べられている。2018年に実施された調査によれば、家事支援サービスの利用状況は、過去に利用したことがある者を含めても1割にも満たなかった⁹⁾。しかし、利用意向をたずねると、家事について「外部サービスを利用しながら行いたい」という回答が、男女ともにいずれの年代でも2～3割程度見られた¹⁰⁾。

料金の負担感や他人が家の中に入る心理的抵抗感などのハードルが下がれば、より多くの人が家事代行サービスを利用するであろう。そうなれば、GDP（国内総生産）にもカウントされる生産活動としての家事労働は、家庭の内外に定着するかもしれない。ふつうの人が気兼ねなく家事を誰かに頼める社会、気軽に家事の助けを借りながら生活できる社会の到来を、筆者は願わずにはおられない。

【注】

- 注1 経済企画庁経済研究所国民経済計算部「無償労働の貨幣評価について」（平成9年5月15日発表）による。
- 注2 全国18歳以上の日本国籍を有する者5000人を対象に2019年9月に実施。有効回答数2645人（回答率52.9%）
- 注3 家事労働の経済価値の算出は、政府により1997年より行われている。経済企画庁（現内閣府）に「無償労働に関する研究会」が組織され、『あなたの家事の値段はおいくらですか？ 家事労働の貨幣評価についての報告』が発表された。3つの貨幣評価法により、専業主婦の労働の貨幣評価は267万円（年収）とされた。
- 注4 2015（平成27）年の国勢調査では、「家政婦（夫）、家事手伝い」として従事する人は11070人にすぎない。
- 注5 家政婦ドラマとしては、市原悦子の人気シリーズ『家政婦は見た！』（テレビ朝日、1983年～2008年）、視聴率40%を稼いだ松嶋菜々子主演ドラマ『家政婦のミタ』（日本テレビ、2008年）、TOKIOの松岡昌宏が女装の家政夫に扮する『家政夫のミタゾノ』シリーズ（テレビ朝日、2016年、2018年、2019年）などがある。その他、筒井康隆原作のSFホームドラマ『家族八景』（2012年）も広義の家政婦ドラマと言える。
- 注6 『きょうの猫村さん』で主人公の猫村ねこは擬人化した雌猫である。人間の家庭に家政婦として派出される猫を、猫のかぶり物をした松重豊が演じている。
- 注7 『ますらを派出夫会』は1956年2月に公開された小田基義監督の映画で、原作は秋好馨の同名漫画である。榎本健一、古川緑波、柳家金語楼、トニー谷などの出演により人気を博し、同年12月には『続ますらを派出夫会 お供は辛いね』が、翌57年5月には『ますらを派出夫会 粉骨碎身す』と『ますらを派出夫会 男なりゃこそ』が公開されている。テレビドラマとしては、1957年12月から58年11月にかけて、KRT（現TBS）系列で放送された（全49回）。

注8 『日本経済新聞』2020年9月7日付夕刊。

注9 ビデオリサーチ調べ。関東地区の世帯視聴率による。テレビドラマ『逃げるが恥だが役に立つ』は、2016年10月～12月にかけて放送された。海野なつみの同名漫画が原作で、主人公2人の契約結婚を軸に、さまざまな社会問題を織り交ぜた社会派ラブコメディとなっている。

注10 『私の家政夫ナギサさん』DVD同封のリーフレットには、MRの仕事について「製薬会社に勤める医薬情報担当者のことです。医療用医薬品の専門的な知識を有し、適正な使用と普及を目的に安全性や有効性、品質等の情報を意思や薬剤師などの医療従事者へ提供します。また、医療現場から副作用情報や有効性・安全性に関する利点・問題点などについてヒアリング等を行います。MRが得た情報は、自社にフィードバックされ、薬剤の改善や新薬の開発にも役立てられます」と記されている。

注11 取材は2020年7月4日に行われた。取材の様子は、『私の家政夫ナギサさん DVD-BOX』に特典映像として収録されている。取材会には、鳴野ナギサ役の大森南朋、田所優太役の瀬戸篤史も参加していた。

注12 “やりがい搾取”は教育社会学者の本田由紀による造語で、経営者が労働者に“やりがい”を強く意識させることで、本来支払うべき賃金や手当を支払わずに逃れる行為を意味する。本田は、やりがい搾取を容易にするからくりとして、①趣味性、②ゲーム性、③奉仕性、④サークル性・カルト性を仕事に付加することを指摘している。

注13 第7話においてナギサさんは、後輩の箸尾さんについて「何事にも全力で突き進むところがメイさんにそっくりでした。そしてすぐ周りが見えなくなるところも」と述べている。箸尾さんを支えてやれなかったという思いもあって、同じMR職で箸尾さんとタイプが似ているメイを特に気にかけるようになったと推察される。劇中では、メイが箸尾さんを探し出し、ナギサさんと対面させるシーンが描かれる。母親になり今は幸せに暮らしている箸尾さんの姿に接し、ナギサさんは長らく抱えていた心の重荷を下ろすことができた。メイに心を救われ、ナギサさんは異性としてメイに惹かれていることに気づいたのだった。

注14 母親の美登里について、メイの妹である唯は「お姉ちゃん（＝メイ）にやれば何でもできる子だっていまだに呪いをかけ続けている」と評する（第2話）。

注15 内閣府「男女共同参画社会に関する世論調査」（2019年）による。

注16 『私の家政夫ナギサさん』の家事（掃除）の監修をつとめたのは、株式会社ダスキンのメリーメイドである。同社はアメリカで家庭向けの家事代行サービスを行っていたメリーメイド社と業務提携して、1989年から日本で家庭向けの家事代行サービスを展開した。ドラマでは、メリーメイドの「お手伝いサービス」を参考にしていると思われる。

注17 母親・美登里は第6話において、妹の唯がメイの結婚相手の候補として同業者の田所優太をあげたところ、「ああいう仕事人間タイプは家庭を顧みないだろうし、似たもの同士でぶつかるわよ。ナギサさんみたいに何でも言うこと聞いてくれる人でないとダメ」とナギサさんを推している。

注18 劇中では“生活あっての仕事”を強調する意味で、“LIFE”を“WORK”よりも優先し“LIFE × WORK SYNERGY”としたと推察される。

【引用文献】

- 1) 内閣府「第2回 新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動に関する調査」厚生労働省『令和3年版厚生労働白書—新型コロナウイルス感染症と社会保障—』, 11頁, 2020
- 2) 天野寛子「家事労働—家事・育児・介護」宮崎礼子, 伊藤セツ編『家庭管理論新版』有斐閣, 1991
- 3) 景山貴彦『テレビドラマでわかる平成社会風俗史』実業—日本社, 4頁, 2019
- 4) 信田さよ子・上野千鶴子「スライム母と墓守娘」『ユリイカ』2008年12月号, 青土社
- 5) 『毎日新聞』2020年9月5日付夕刊
- 6) 内閣府『令和2年版 男女共同参画白書』68—71頁, 2020
- 7) 大沢真知子『ワークライフシナジー 生活と仕事の〈相互作用〉が変える企業社会』岩波書店, 20頁, 2008
- 8) 大沢真知子, 前掲書, 233—234頁

9) 内閣府, 前掲書, 39-40頁, 2020

9) 内閣府, 前掲書, 42-43頁, 2020

【参考文献】

- ・伊藤るり(編著)『家事労働の国際社会学 ディーセント・ワーク』を求めて, 人文書院, 2020
- ・上野千鶴子『資本制と家事労働—マルクス主義フェミニズムの問題構制』海鳴社, 1985
- ・海野なつみ『逃げるは恥だが役に立つ』全10巻, 講談社, 2013年~2016年
- ・清水美知子『〈女中〉イメージの家庭文化史』世界思想社, 2004
- ・竹中恵美子『竹中恵美子著作集VI巻 家事労働 (アンペイドワーク論)』明石書店, 2012
- ・藤咲あゆな『小説 家政夫のナギサさん 上巻』ハーバーコリンズ・ジャパン, 2020
- ・藤咲あゆな『小説 家政夫のナギサさん 下巻』ハーバーコリンズ・ジャパン, 2020
- ・本田由紀『軋む社会 教育・仕事・若者の現在』双風舎, 2008
- ・四ッ原フリコ『家政夫のナギサさん』ハーバーコリンズ・ジャパン, 2020
- ・四ッ原フリコ「家政夫のナギサさん」(電子書籍)コミックシーモア 恋するソワレ 全11巻
(https://www.cmoa.jp/special/?page_id-kaseifunonagisasan)

【映像資料】

『私の家政夫ナギサさん』DVD-BOX, 多部未華子, 大森南朋, 瀬戸康史 出演, 全9話・特別編・特典映像, TBS, 2021 (DVD)